

家族理解入門

家族の構造理解・応用編

第9回

2019/12/15 版

団士郎



ウクライナ・キエフ・チェルノブイリ博物館

写真は2019. 9に訪問したウクライナの首都キエフにあるチェルノブイリ博物館。膨大な資料と、長い長い日本語音声ガイドは、聴いてるだけで疲れるボリュームだった。その後、当然、30キロ、10キロとゲートのある、立ち入り制限区域も現地ガイド付きで訪問。チェルノブイリの新石棺と呼ばれるドームに覆われた原発事故現場近くにも。

この後、アメリカ制作のTVドラマシリーズ(スカパーで放映)「チェルノブイリ」を観て、福島通い九年目になることに絡んでいろいろ思った。

当時、ソ連国民は何も知らされず、懸命に国のため、家族のために、事故処理にあたって多くの人々が死んでいった。それがこんな風に明らかになるのに三十年以上かかっている。福島で本当に起きていることが明らかになるのに、どれくらいかかるのだろうか？

*

月刊ケアマネジャー誌に「家族の構造理論を活かす」というタイトルの連載が、2019年11月号、12月号に掲載された。中央法規出版は「家族理解入門」を出してくれている出版社で、高齢者福祉には門外漢の私に以前、二年ほどの連載を依頼してきた。それはまだ対人援助学マガジンが発行される前の事だ。

その後、連載をベースに作った単行本(2013年刊)は実に優秀な一冊で、コンスタントに増刷を続け、今七刷りにまでなっている。まんが「木陰の物語」の単行本「家族の練習問題」も順調に第8巻(2019. 12. 1発行)を迎えている。ぜひ皆さんに読んで頂きたいと思う。無料配布冊子「木陰の物語」も今年9冊目が完成して、8月のむつ市図書館でのマンガ展から配布スタートした。来年2020年には満願の10冊目になる。区切りだから何か形にしたい気もするが、まだそこまで具体的イメージは及ばない。

九 パワー ②「コントロール(権威)」

権威って

少し前にはよく、父親の権威がなくなったりとか、教師の権威も地に落ちてしまったとかいった。この発言の多くは、あらかじめ用意された持って行き処があって、昔は良かったとか、私の子どもの頃はこんなではなかったという話だった。

これへの反論も類型化されていて、家父長制の家族批判や封建的な男尊女卑の秩序指向への反発がたいていだった。嫁の忍従や、女性を押さえつけて成り立っていた仕組みが、まともなものであるはずがないという話だ。

「権威」や「権力」という言葉に自動的に反発し、安易に平等を口にしておけば大丈夫と考えているとしか見えない言説も少なくない。

「権利」ならみんなのものだが、「権威」、「権力」となると、一部の人の特権のように感じられて、手に入りそうもない一般市民には、拒否感が生まれやすいのかも知れない。

それに「権威」と「権力」の区別も微妙な話だ。権威があっても権力も持っている立場。これにはそう簡単に対抗できない。一代で築きあげた創業社長などはこれで、実態と形式が融合しているのだから、簡単には崩せない。

二代目、三代目で会社が傾くのは、権力は引き継いでも権威は引き継がないから仕方ないことである。

相続資産に置き換えて考えるなら、引き継げる資産（不動産、動産を含めて、物化できるもの）は全て権力。

その人が亡くなると同時に消えてしまう高潔な人格や人望ばかりではなく、医師や弁護士、公認会計士等の難関資格や能力など、一代限りで消えてしまう資産が、「権威」と類似していると言えるかもしれない。

「あれだけ尊敬された人でも、わが子には甘くなるんだなあ」と、亡くなってから批判されるような後継者問題。跡継ぎ問題はまさに、パワー（ここではコントロールする権威と権力）に関わる家族問題である。

ファミリービジネス（同族会社）の問題は、アメリカでは大きなテーマだそうで、経営学と家族心理学が複合された研究も盛んだと聞いたことがある。しかし日本でこの視点は、あまり耳にすることがなかった。

中小企業の二代目、三代目のスキャンダルや倒産話だけに好奇心を示す人々が多いのは、権力に対する庶民の嫉妬が背景に横たわっているからだろう。

権威はあるが権力(欲)のない人。傍観者的には、こういう人が理想のように思える。しかしこの人の直ぐ近くに、権威はないが権力の欲しい人が蠢くのは当然だといえる。

権威を持った人が責任として自覚を持って権力を握らなければ、酷い権力者が傍若無人に振る舞う場で、一般市民は生きるしかなくなる。

そうしたことを承知の上で、大原則の「権力は腐敗する」ということも常に肝に銘じておかねばならない。

アカデミックな権威と金にものを言わせる権力と、政治が結託してしまった

ら怖いものなしである。近年の「原発」問題の底なし沼化は、単にエネルギー政策問題などではない、欲深い構造的な闇を見せている。

最近暴露された関西電力の原発マネーの構造的問題。おそらくあれでも、見えているのは一部だと考えるのが見識というものだ。（こう書いた後、福井県職員への金品のばらまきも明らかになった）原発問題は制御（コントロール）不能と化した、莫大なパワーの話だ。

学校の権威、今昔

日本人の全てが共有している学校体験。そこで面倒な問題が次々と起きるようになって久しい。

昔、学校はみんなの財産だった。恩師のいる母校が、自身の出発点であると思いつき出と共に語る人も多かった。卒業校に、様々な記念品を残したりすることも気持ちに添うことだった。しかし近年、日本社会では、それがどんどん変化してしまうことになった。

チャン・イーモウの学校

以前、「児童心理」の連載で、こんなことを書いた。少し古いが再掲する。

世間話の定番の一つに、学校が取りあげられるようになって久しい。不登校、校内暴力、学級崩壊、基礎学力の低下、労働環境としての学校のブラック企業化など、まるでニュースタイトルの宝庫である。学校が良いという話を聞くことが、本当に少なくなった昨今の日本。

そんな中で二本の中国映画をみた。チャ

ン・イーモウ監督の「あの子を探して」と「初恋のきた道」。共通しているのは、中国の貧しい農村の学校が舞台ということだ。

映画「あの子を探して」は年端もいかない少女が、先生が居なくなってしまったために代用教員を引き受けるところからはじまる。

生徒達の日々の貧困は、勉強どころではなく、稼ぐために都会に流れ出てゆく。生徒を減らさなかったら賃金がもらえる約束になっている主人公は、来なくなってしまった生徒を捜しに都会に出る。そこでいろいろなことが起こる物語だ。

この学校では黒板、白墨等の必需品がとても大切に扱われていて、そのとぼしい備品を通じて、みんなの学校への思いがひしひしと伝わってくる。ささやかな学用品への敬意は、「学び」に対する尊敬から生じているものだ。

映画「初恋のきた道」は貧しい寒村に初めて学校が建つ喜びと、赴任してきた若い先生に、一目惚れした村娘の恋物語だ。

娘の思いはなかなか届かず、映画を観ている者には、伝わらないのが自分の思いでもあるかのように感じられる。紆余曲折があるのだが、やがて思いは成就し、娘は教師の妻となる。

それ以来何十年間、妻は授業が行われている学校の庭に毎日出かけて、夫が子ども達に読み聞かせる声を聞く。

この夫の音読を聞く妻のいる学校の風景がいい。観客はみんなが大切にしている学校の事を思い、自身の故郷の学舎を思う。

事件も悲劇も起きたりはしない。しかし多くの人が、涙を流さずに見ることはできなかったと語る佳作だ。

ここで描かれているのは、何かを強く思

い続けるところである。不足が人の思いをシンプルに強くしている。人が思うこと、願う続けることに、国や時代の違いはない。それはこんな事だと、チャン・イーモウ監督にみせられた気がした。

学校がこんなに輝いていた時代があったのだ。懐かしい恩師のことを久しぶりに思い出して、とても気持ち良かった。

母校

しかし今、そんな感覚は我々の回りからどんどん消えている。そもそも故郷の母校など、廃校になってしまっているか、統廃合されて別の場所に移ってしまって面影もない。教員も人事異動を繰り返し、卒業後数年で誰も知った先生のいない学校になってしまう。

「能力不足の教師（貧乏くじ）に何年も担任されるのは迷惑、不公平だ」と言う保護者クレーマーの声に、毎年、交代することにしてしまった小学校の学級担任単年度制など、いったい何をもたらしたのだろうか。

そんな小学校では六年間で六人の担任なら少ない方である。病休、産休、育休、年度途中の退職などで、担任交代も珍しくない。それだけ頻繁に交代していると、お互い名前を覚えるのもままならない。

並の子ども達は、嫌われたくはないだろうから、教師が替わる度に適応努力をすることになる。大人の顔色を見て、出来るだけめ事少なく、損はせず過ごしたいと願う子どもの誕生だ。

大人と子どもなのだから、教室内の力関係は明瞭だ。担任教師との関係を築く間もなく、トラブルに直面する子ども達

は、親に訴えるしかなくなる。その結果、援軍に出てくる保護者と教師の対立や、ぶつかり合いはやむを得ないことになる。被害感の強くなった学校は、防衛的にならざるを得ない。

義務教育として、ほぼすべての子ども達が長年通う場所の体制がこんな事でいいのだろうか？学校をこんな風に市民が追い詰めるのは適切なのだろうかといつも思う。

日々のことや個別のことでは不満な点もあるが、総合すれば5 1勝4 9敗の勝ち越し、こんな感覚が学校生活では大切なのではないか。みんなが連戦連勝を目指して必死の余り、何もかもを短期即決の勝ち抜き戦にしたがっている気がしてならない。勝ち抜きトーナメントの勝者は、最終的にはたった一人である。

多くの子ども達の中にある様々な可変性（例えば「大器は晩成す」）を支えるのは教員の眼差しだ。移り変わりの激しい世の中で、変わることなく持続する相互信頼。そこに必要なのは、揺るぎのない権威が存在できる関係なのではないだろうか。

父親の今昔

単身赴任

父親は大手製造業の営業マン。息子が二人ある。子ども達の手が離れてから妻も仕事を始め、思いのほか順調に生き甲斐も見いだしていた。

変化は息子達が共に小学校高学年の頃に起きた。業態の変更で父親の世代の仕事は大幅に縮小。その結果、取引先子会社に出向ということになった。赴任先

は小さな地方都市。

始めた仕事が軌道に乗りかけていた妻も、友人関係が深まりつつあった兄弟も転居を嫌がった。父親も本意の転勤などではなかったので、しばらくしたら戻れるだろうと単身赴任を決めた。

しかし実際は、そのまま10年近い時が経つことになる。彼が呼び戻されたのは会社の業績がますます厳しくなっていた時機だった。つかの間の本社勤務を経て、希望退職を募られる対象世代になっていた。

振り返ってみると、家族にとってこの10年間は決定的だったことは分かる。母親と息子二人の母子家庭暮らし。思春期の息子達はもう、親にそれほど何もかも話す時期ではなかった。

高校入学、その後の進路選択。この背景要因になる息子達の日常を、父親は全くと言っていいほど知らなかった。兄弟はそれぞれ、誰にも相談せずに自分たちの進路を決めた。その結果、両親は共に大卒で息子達は二人とも高卒という結果になった。

なにも学歴の話がしたいのではない。希望があって選んだ道なら、学歴などなんでもいいだろう。しかし彼らの選択はそうではなかった。

自分のことを父親は何も分からないだろうと息子達は思っていた。家事に仕事に大忙しの母親にも、負担をかけてはいけないと思った。だから兄弟はそれぞれ自分の将来を、その時の成績と担任の言葉で決めて自己責任だと思った。

進路問題に詳しい親など、そう居るものではない。だから頼りになるかならないかではない。そんな時に、迷いを投げかける相手としての親を息子達は知ら

なかった。受験や進路選択に一番詳しいのは教師だと思った。それだけのことだった。

リストラ

一方父親は沢山の同期入社にいる団塊世代。歳は同じでも、結婚の時期や、家庭事情には個人差が大きかった。比較的、結婚も子どもを授かるのも早かった彼は、希望退職者を募る対象社員の中では、子ども達がすでに自立している分、まだしも恵まれた条件だと皆から思われた。

同僚の「わが家は下が小学生で上が中学生、親の介護を担う妻と四人、私の給料袋一つの暮らしなんだ」という訴えと同列には退職要項を見られなかった。同期入社の中から解雇者を出すくらいならと、早期希望退職に挙手した。五十歳になったばかりだった。次の仕事の当てがあるわけではなかった。

妻は仕事を続けていたし、息子達もそれぞれ高校卒業後、仕事に就いていたので、みんなから気楽だろうと思われていた。

退職金の上積みも多少はあったが当然、再就職を考えていた。しかしその頃から社会は、中高年の再就職には厳しい時代に入っていた。スキルアップして転職だとか、ヘッドハンティングとか、そんな話をしていたのは、つい数年前のことではなかったかと思った。

再雇用の為の訓練講座でパソコンも覚えた。そして二年の失業者暮らしの後に、ビル管理会社の仕事を得た。二交代の変則勤務。監視カメラ映像のモニターがずらっと並んだ部屋で1人、自分の仕

事ぶりもモニターされている状況で、ひたすら画面を見続けた。

そして再び、今度は六十歳の誕生日に定年退職になった。七年余り勤めて、還暦失業者になった。

兄弟はいつしか共に三十歳を超えていた。両親が三十歳の時にはもう、彼ら兄弟を抱えた四人家族だった。それから三十年余、今も四人家族のままだ。

息子の事情

景気の悪化で、長男が長年勤務していた会社が人員整理を余儀なくされた。個々人の勤務評定ではなく、一律のルールでリストラされる事になった。その線引きが高卒社員の整理だった。

それを知らされたとき、父親は誰にも知られないところで泣いた。

もし自分が長男の思春期と一緒にいてやれて、息子が進路で悩んでいたとしよう。自分も妻もことさら勉強がしたかったわけではないが、親に大学まで出して貰った。相談されたらきっと、「何かやりたいことがあるなら、高卒でその道に向かうのも良い。でも、特別にないなら、とりあえず大学に行っておけ。父さ

んも母さんも、親にそうして貰ったから」、きつとこう言ったに違いない。それでどうなったかなど、誰にも確かなことが言えるわけではない。

しかし、もしそうだったら、息子は今の会社に残れていた。好きで頑張っていた仕事だった。高卒という学歴が失職の合理的根拠であるはずはなかった。

「何が引き金になるかなど、誰にも分からない。だから皆が昔からしていることはしておけ」、こういう言いぐさが、意外に賢明なことが少なくない。

選択や自己決定、自己責任などと前のめりの理屈の口やかましい時代に、こんな古臭い人生訓を口に出来るのは親の権威に他ならない。

時流に乗った結論は賞味期限の短いことが多い。ずっと後になって、「親は、このことを言ってたんだなあ・・・」と思いつく経験のある人も決して少なくない。



よく人生を旅にたとえる



たしかに子育てをしながら、ふとした局面で、自分がキャラバンを組んで旅をしている、そんな気がする



中国名を名乗る少女・中学二年生の華に会った



第二十五話

旅する家族

相談だから問題があった



団 士郎

他生徒の親たちからの非難と苦情だった

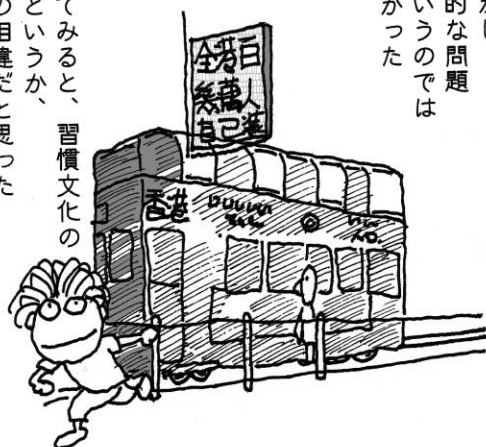
困る……

華は夜遅くに、男の子の部屋に遊びに行ったりするという

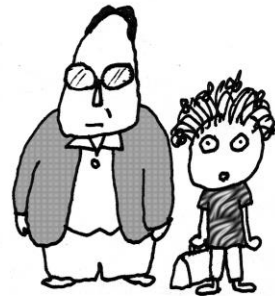
しかし、性的な問題というのではなかった



聞いてみると、習慣文化の違いというか、感覚の相違だと思った



華は小学校五年生の時に、香港から山間の町にやってきた



当時、外国人の児童に地域の学校で、教育を実施できる体制はなかった



担任の熱意で一から日本語を教えたらしい



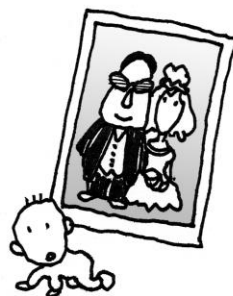
本人に会ってみると、屈託のない元気な女の子だった



単身でやってきた父親は、日本で結婚し、子どもも生まれた



しかし、彼には香港の施設に預けた娘があった



それが華だった



父はもともと
香港の人ではなく、
中国本土の
人だった



食えない貧しい生活に
見切りをつけ、
二十歳過ぎに
密出国した



深夜、真っ暗な海を、香港に向か
って泳いで渡ったのだという



当時香港では、
一定期間以上
居住すると
合法的存在として
認められた



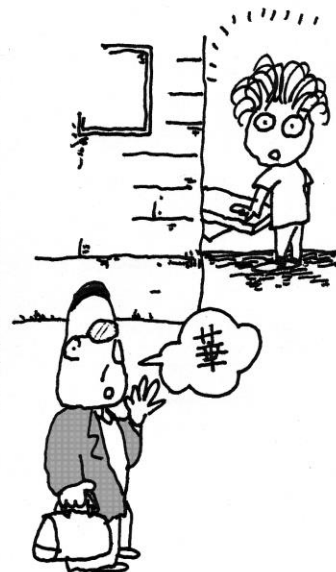
そして日本にやって来た



ちよつと真似の
できないような
努力の結果、
自分の店を構え、
結婚もした



そして後日、香港時代に離婚し、
施設に預けていた華を迎えにいっ
たのだ



現在、父親は
帰化申請の
つもりをしていて、
自営業で
頑張っている



だから最初、華のことが支障にな
るのではないかと不安もあって、
熱心に相談に来た



しかしその内、奇立ちも見せるようになった



そしてある時、
「華がこれ以上
迷惑をかけるようなら、
私の家族が脅かされる。
もう一度、
香港の施設に
戻してくる」
と言いだした



なだめながら、父親の気持ちも、
彼女を受け入れた日本の家族の思
いも想像がついた



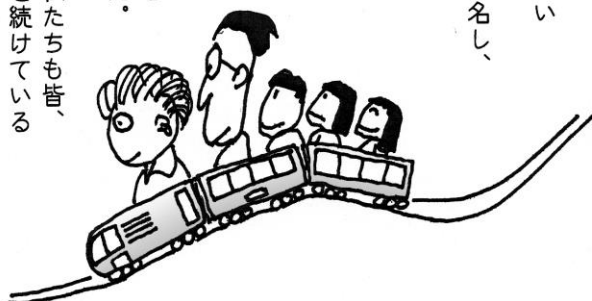
義理の母と華の関係や、
異母弟妹との関係、
家族の一員としての
安定感など、
様々な課題があった
ただ、それでも
香港に戻すのは
あまりだと思った



いろいろ経過があつて最終的に、
日本の施設に行くことになった。
そしてそこから高校進学もした



あれから二十年近い
月日が過ぎた。
高校を卒業し、改名し、
就職もした彼女は
やがて結婚した。
今は三人の子の
母として、
幸せに
暮らして
いると聞く。
やっと
長い旅の
終わりが...と
書きかけて思った。
そうではない。
今もなお、華も私たちも皆、
終わりのない旅を続けている



そして

数年後に帰化申請が認められて、日本人になった父親のことを時々思い出す。返還後の香港や現在の中国の発展ぶりを、どんな思いで見ているだろう。捨てた故郷との再会は起きただろうか？

貧しい農村に生まれ、そこを捨てて戻れない旅に出た10代後半。香港での厳しい暮らしの日々。そこから紆余曲折してやっとたどり着いた異国の山間都市での落ち着いた暮らし。事実を振り返れば、彼は子ども時代、ほとんど何も親から充たされることはなかっただろう。

以前、香港の紀行番組で、多くの人たちが泳ぎ着いた海辺の寒村をみた。身一つで夜の海から新しい世界に歩み始める青年達の心細さは、日本の中流小市民の子として育った私の想像を超えていた。文字通り彼の親は命だけをくれたのだろう。

そして香港での暮らしの中で、彼は父親になった。あとは漫画の通りだが、いつも思うのは「なぜ、彼は日本社会で幸せに暮らしながら、香港で父親であったことを放棄してしまわなかったのだろう」ということだ。日本で妻との間にもうけた二人の子どもとの四人だけを、自分の家族だとは考えなかったのだろうか。

自分は親から何かをしてもらえる状況ではなかった。だから華を同じ状態に置いても自責は不要だっただろう。「私が生きたように、お前も自力で生きてゆけ!」、こんな主張も彼には正当性があった。しかし彼は面倒な手続きを経て華を迎えた。ところが華も、迎えられた日本の家族の下でけっして大人しく暮らし

たりはしなかった。

帰化を願っていた父親にとって、これは予想外の出来事だったかもしれない。家族の不祥事は、帰化申請が却下される要因になりかねない。「もしそうなったら、どうする?」と突きつけられていた。

思いあまって、片道航空券を手に面接にやってきたのは、せっぱ詰まっていたからだろう。

しかし父娘をあそこで分離させるのはおそらく間違っていただろう。愛されたことのない子や、追い詰められた子どもが、これでもか、これでもかとテストイングするのは、これまで何度も見た光景ではないか。

ここでは多くの日本人の家族と同じように、頑張らせるのが仕事だと思った。父親にそう主張することが、私たちの仕事の権威だったかもしれない。

そのかわり専門家として、実行可能な手段は模索する。そしてその判断の結果起きるであろう事には責任の一端を担う。こう伝えるのがプロである。未来に何も起きないように手を打つことなどできるはずがないのだ。

*

あれから四半世紀以上の時が過ぎた。現在を詳細に承知しているわけではないが、あの時の結論が間違いではなかったことは、その後の展開によって証明されていた。

いずれにしても、コントロール（権威）は、息長く続くものの事であり、支配と一線を画すものである。この機能がどのように働いているか、いないかは、家族の日常エピソードの中からいくらかでも拾い上げることが出来るだろう。